



長風叢書第三十三篇

歌集

娘と共に

羽部鶴子

昭和四十八年八月二十日

歌集 娘と共に

著者 羽部鶴子

久喜市本町五丁目四番八号

発行者 鈴木十糸

発行所 古径社

浦和市元町二丁目二六番二三号

振替東京七二八五二

電話浦和(32)二三〇三

製作 新躍社

定価 一二〇〇円

---

## 序

『娘と共に』の著者、羽部鶴子さんはいつも歌会に出てくる。出て来て、何を言うわけでもない。にこにこして柔和に坐っている。私の家にも、たまには来てくれる。やはり何を言うわけでもない。歌のことも話したことはない。私よりいくつか年上のようにあるが、よくは知らない。いつの時も、ほとんど目につかない質素な洋服である。女性であれば、年輩の人でもそれなりに衣類の心くばりはあると思うが、この人はそれを感じさせない。帰ったあと、どんな服装だったか思い出せないし、何を話したのか、それも思い出せない。何か用事があったかと思ひ一度もなかったようだ。珍しい物や季節のものを持って来てくれるだけである。来ても決して長居はしない。音もたてずに来て、音もたてずに帰って行くような感じである。そんな素朴さである。無心なのである

う。この人に会ったあと、いつも思うのは、このように無心に、無垢に生きられたらいいなということである。

作る歌も、歌を作るなどという意識はなにもないようである。なんとなく歌らしいものを作っているというだけのほれぼれとした気持であるらしい。人に見せようとする者の気配は、この人にはない。歌が好きで作るので、その歌がいい悪いということもあまり気にならないらしい。歌会で、いいと言われようと、悪いと言われようと、ただにこにこしている。頼りないほどだが、本人が何も受けつけないので、言った方が呆然として引き下るといことがよくある。そんな中から次のような歌が出てくる。

乗り合へる人の手に持つ雨傘をたるる雫も麦の香のする

四句まで平凡で、結句で気持が入って緊り、はっとさせる歌である。

事もなく過ぎて門松を抜きしあと崩るる土の色新しき  
年たちて門松はみな払はれぬ斑雪はぐれを置きて鎮まる町は  
そのいはれわれは知らねど抜き終へし門松のあとにその秀つ枝差す

しみじみとした歌である。古い日本の伝統を大切に、心がこもる。

焼き捨てる中の五六本過ぎし日に子等の幼く削りし鉛筆  
長きまま早や捨て去ると末の子のこのけちくさき鉛筆の丈と  
短きは捨てんとしつつ持ちてをり子等の学びてへりし鉛筆

こんな歌もある。卒直で、庶民的なおふくろの味が懐しい。

アルバイトといふも不用の品なれば買はずかへせし事にこだはる  
「子が来たと思って買って下さい」と言へり学生かあるひは知らず

これも母性の味で、しかも氣風きっふうよく、さわやかである。

あやさるる如き女の権利あり我は如何なる投票すべき  
ひそひそと語る選挙の抜目なき声か闇より洩れ来て聞ゆ

冷静に、痛烈に選挙を見ている。ふだんの柔和な面立のどこから、こんな鋭利な歌が出てくるのか不思議である。

年賀状一枚出しぬ届きしも一枚にして年を寿ぐ  
松の内過ぎて一枚また一枚返信年賀状の夫娘にとどく  
出さざれば来るあてのなき年賀状待つとはなしに待ちつつあはれ

初期の歌だが、孤独に過ぎた期間があったらしい。殊に新年の孤独である。

心に沁みとおるものがあり、みずからの心が親しかったのであろう。今は歌会仲間だけでも少くない人数と思う。

いろいろの歌をあげたが、これらの歌が無心と無垢から生れて来た歌である。日常のつぶやきの中から期せずして成ったという歌である。意識して作つたものの汚れは微塵もない。童心の歌といえよう。

これらの歌だけでも楽しい一冊の歌集になるが、作者の中心をなすものは次にあげる病気の娘の歌である。

仰あやに寝て病めば天井より見えぬ娘のために吊りゐし金魚死にたり

長く敷く蒲団の熱のしみ行きて畳匂ふと娘は言ひて病む

うつうつと眠る病む娘にまつはりし蠅打ちとりて勝ちし思ひす

吐き捨つる葡萄の種を一つづつ皮のくぼみに娘は盛りて病む

腹ばひてけはしきまでにきびきびと髪洗ふ娘の性を思へり

病みて臥す娘が惜しげなく切る髪の落ちて畳に渦をなす丈



娘の注ぐ愛に育ちて無能なる猫か鼠に飯を食はれつ

絶食を解かれたる娘のやはらかき粥をつきあふ残る幾箸

臥せる娘の蒲団の下となりてゐる畳も黴びん降るはしり梅雨

臥せる娘に近く吊りおく細長き蠅取紙を揺る蠅のおと

夜々に拭く娘の背の薄き肌を噴く汗の粘れるぬくもり疎き

これらの歌が、作者の娘を看取る歌である。なによりも母親の愛情が痛烈で豊かである。ここには歌を作るといふ意識はない。無心に、卒直に、日記のよりに書きつけて、おのずから出来上った歌である。この程度の歌は抜こうと思えば、いくらでもまだ抜くことが出来る。

この母親の愛情も、十年を越す長い看病である。母と娘の間と言っても、これだけの綺麗ごとで済む筈がない。次のような歌が出てくる。

うちつけに物言ふ時も病むゆゑと娘に湧く怒り長くつづかず

おのづから疎くなり来し娘の看取り地震のゆれ来て緊張かへる娘より来る便りと言へば物を欲ることのみ多し知りて待ちゐる手に取りて見るは見なれし粗雑なる娘の文字と知りて読みつぐ受話器より流れて低く娘の言える声すさまじと思ひつつ聞く物を欲ることを詫びつつなほ続く娘の文字のわがまま許すたくらみのありはせぬかと我に来し娘よりの便り読み進みゆく

看護に倦むことがある。また親子の間にも葛藤はある。結局は娘のわが儘を許す。これが普通の優しい平凡な母親の愛情であろう。

この母親がみずから過ぎた長い道程をふり返り、今日以後の人生を一人見擬めた次のような歌がある。

やすらげく世の生遂げん日を願ひ来つつ身に沁む余命あるなり  
願ひ持つところ何時しか衰へて世にありふれし生を養ふ

免ることのなからん死の来ん日刻みて早き世の時が逝く  
面伏せて生きて行けよと戒めし父母の言葉が突き放す  
飛びて来し蚊の鳴く程にはほそぼそと暮す息づきを世に晒しをり

沈痛の歌である。長く世を過ぎて来た年令の重量を思わせる。

遊ぶ子に追はれて写る蝶の影土に踊ると見れば過ぎ行く  
注ぎゐる水に寄り来て崩れ易き豆腐の位置のまた移りゆく  
逝く年の雨にインクのしみ出でし文字かすかなる葉書の届く  
洩る桶を奪ひ合ひつつ自が墓所を浄める人の心も見たり  
その夫の事故死の日より時を経て妹の手にも肉付きて来し  
この窓に四季を通して恥づるなく己が生きざまをさらし来りぬ  
一冬を辛く保ちて霞む日に白菜は薑の立ちはじめたり

これらはこの一冊の歌集の最後の方に見られる。心こまやかで、表現も温雅である。なにとなく、いつとなく、この人の歌もここまで来ている。最終の二首、身に沁むものがある。「この窓」とは何だろう。作者はさり気ない日常詠として作ったものであろうが、「この窓」を「この人生の」と置き替えてみたくなる歌である。深いところから誘うものがある。次の「一冬を」の歌もまた「この人生を」という意味に暗示するものがある。人の生涯の最終の茫漠を象徴するまでになっている。無心と無垢の到達した歌の一つの姿を思わせる。

長く臥せていた娘もいまは癒えて勤めている。作者にはいま何の不安も負担もない。それに至って健康である。これからも作者は無心に一人の歌を作って行くのであろう。

昭和四十八年二月二十八日

鈴木幸輔



目次

序 鈴木幸輔

I 葡萄の種

光

子等の鉛筆

一月一日

28 26 23

書棚	梅雨照り	師走	我の一日	一枚の賀状	修理	売り強ひる	霊迎へ	雷雨	麦の穂
51	49	47	44	42	39	37	35	33	30

## II

視線	80	髪を切る	77	共に長く	68	眼	66	蚊取香	62	新聞の日付	58	年立ちて	56	アルミ貨	53
----	----	------	----	------	----	---	----	-----	----	-------	----	------	----	------	----



榧の実 暑気 地震 梅咲く 脈搏 体温表 柔かき粥 夜の虫 お手玉 髪の孤独

115 112 108 105 103 98 93 90 86 83